

古木の 時間



卒業記念: 東京帝國大學農學部
農藝化學科 思ひ出 より(1939年)
(農学生命科学図書館 所蔵)



農藝化學科 皇紀2601年(昭和16年)
卒業アルバムより(1941年)
(応用生命化学・工学専攻 所蔵)

古

木や巨木は、その姿、形がどのようなものであれ、不思議に「絵になる」ものです。その周りには、独特の空間があり、時間が流れています。屹立しているものもあれば、曲がりくねりながら大きく枝葉を広げているものもあり、受ける印象は様々ですが、安心感や懐かしさを抱かせる点では共通しています。これは、その場を動くことなく静かに「樹ち」続けている古木が土地との確固たる結びつきを象徴しており、その姿に自分を重ねるがゆえではないでしょうか。

写真は、農学部正門付近の1939年と1941年頃の様子です。1941年の写真には現在の正門正面のスタジイの姿が写っていますが、1939年には写っていません。現在のスタジイが何時から今の場所に「樹って」いたかについてはこれ以上の特定はできません。写真を遡ると、過去に植え替えや移植が行われた可能性もあり、現在の姿をはっきりと確認できるのはこの1941年の写真からです。それでも第二次世界大戦の頃から弥生キャンパスを見続けていることとなります。

そもそもスタジイは弥生キャンパスを象徴する樹種といえます。1998年に実施した本郷構内(本郷、弥生、浅野キャンパス)樹木調査によると、胸高直径10cm以上の樹木約3500本のうち、スタジイはイチヨウ、ケヤキに次いで3番目に多く200本程度ですが、その約3割が弥生キャンパスにあります。もう一ヶ所、懷徳館庭園にもまとまった植栽が見られ、かつてスタジイが本郷台地における主要樹種の一つであったことをうかがわせます。また、弥生キャンパスの境界部にはスタジイが列植されていて、本郷キャンパスのクスノキの植栽と対比して、スタジイによる特徴づけが意識されていたこともうかがえます。

落葉樹の軽やかなイメージが好まれる昨今ではスタジイはいかにも泥臭い印象です。しかし農正門前スタジイのドッシリとした安定感と見る者を包み込むような姿は、安全・安心を標榜しフィールドに重心を置く農学を象徴するに相応しい姿ではないでしょうか。

森林科学専攻 森林風致計画学研究室
下村彰男 教授